
兎青年と少女

あさい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兎青年と少女

【Zコード】

N1347U

【作者名】

あわい

【あらすじ】

兎の象徴がないが故にぼっちな女の子とその子に耳をあげた兎青年の話。

「はふっ」

声をあげて少女はそれを外す。頭についていたふわふわとした毛のついた耳が、とれた。走つたりしている最中に外れないようにきつめに固定されているために、はずすときはどうしても声が出てしまう。解放された頭を大きく振る。どうしても自分のものじゃないから重たいのだ。続いて尻尾も外す。腰が軽くなつた。

宿屋の安っぽいベッドに座れば、ちょうど鏡が目に入る。映るのは耳の生えていない頭に尻尾のない尻、貧相な少女の体。他の人と違い、獣としての象徴がなにもない、異形の身体。

少女の母は、異形である彼女を捨てることをためらわなかつた。彼女が生まれたのは小さな村で、こんな化物が生まれたと知られたら村八分にされることは確実だ。しかし、彼女は生き残つた。おそらく外見に獣の名残はなくとも中身に獣がある。幼いころはどうやつていたのかは記憶にないけれど、物心ついたころにはもう自力で、独りで生きていた。

ばたん、というドアの音。

「あ、おかえり
「うん」

入ってきたのは眼鏡の青年だ。頭にはやわらかそうな、兎の耳が生えている。柔軟な微笑みは少女の大好きなものだ。

青年の持つている紙袋に少女の目が移る。

「なに？ それ」

「そこの屋台で売つてたんだ。好きでしょ？」

「ううううの」

「わあー。」

出されたのはまだ湯気を立てる焼き芋。大好き！と少女は青年に抱きついた。おつとつと、と青年はその場で躊躇を踏む。兎族は基本的にか弱くて、青年より頭ひとつ小さな少女ですら押し倒すことができるだらう。最終的に壁に背中をぶつけた形で青年の足は止まる。

少女は紙袋に頭を突っ込む。その首根っこをつかまれる。

「だめ。ちゃんと手で食べる」

「……はーい」

幼い頃がそんなかんじだつたために彼女の食事は基本的に汚い。少女はしづしづ袋の中に手を入れる。

「あつー。」

両手でおでだましてからふつふつとぶき、それからひとくち噛み付く。ふわり、少女の顔が緩む。

「おいしい」

「だと思つた。君が草食でよかつた」「草食なわけじゃなこよ。たぶん雑食」

「え」

「そのうちあなたの」とも食べちゃうかも」「うそ」「うそ」

「うそ」

あからさまにほつとした表情になる青年を少女はくすくす笑う。自分より年上の青年をカワイイと思つことは間違つてゐるのかもしれないけれども、彼はカワイイ。兎族はみんなそんなんだろうか。まさか自分も同じようなことを思われてゐるとは知らず、少女は笑

つたまま焼き芋に噛み付く。

口の中でとける甘さ。野いちごも甘いけれどそれよりもっと甘い。人里に降りてくるまでこういう加工したものなんて食べたことがなかった。青年のおかげだ、全部。だから、食べちゃったりは、しない。

「ル、ル、ル、ル」

ふと、思い出して彼女は声をあげる。焼き芋はもう半分ほど胃の中に入っている。対して青年はまだ少ししか減っていない。

「あ、じつだった？」

「全然ばれなかつたよ。走つたし飛んだりもしたのに。でも、ちゃんと痛い」

「そっか。でもどうやつたら接着できるんだろうなあ。蒸れるから本当に完璧に接着はできないし、だからといって緩めれば今度は外れる危険性が伴うし……」

ぶつぶつと咳きながら青年は少女の頭に触れる。少女はくすぐつたそうに身を捩るも青年はそんなもの全く気にしない様子で形を確かめるように手を動かす。おそらく青年は、少女が声を上げたとしても全く気にならないだろう。

「鬼族つてみんな学者とか博士とか技術者みたいななのなの?」

少女が訊けば、我に返つたのか青年は手を離す。

「ううん、そういう人が多いけど全部じゃないな。幼馴染に商人に

なつた奴もいる」

「ふうん。いろいろなんだ」

「うん、いろいろ」

わざわざ律儀に青年は頷く。そんなところが可愛く思えて、少女は手を伸ばして青年の頭をなでる。少女が身を捩ったのとは反対に青年は全く気にしない様子でそのまま焼き芋を食べ続ける。

「ありがとう、ね」

「うん」

青年は焼き芋を食べ続ける。黙々と。

「うん、って。なんかもつちゅつと畳ひげを」とあるんだじゃないの？」

「え、ある？」

「……もうこいや」

少女は後ろのベッドに寝転がる。ベッドがまた音をたてる。もしかしたら兎族はとても鈍いのかもしれない。いや、もしかしなくとも彼自身がとても鈍いんだろう。ありがとう、なんて普段いい慣れない言葉をいうのが少女がどれだけ辛いのか、青年は気づかない。

ふと彼女はいたずらを思いつく。わざと服を少しだけ脱いで、肌を露出させる。

「ねーえ。お礼とか、したほうがいいの？」

「いらない。獣の象徴がない人間つていうすっごく貴重な君自身が、

最大のお礼だと思う」

「なにそれ。ただの実験台つていうこと？」

「……うーん」

せめて否定して欲しいんだけれども。そんな少女の心の声なんて氣付かず青年は唸る。

諦めずに少女は腹筋のみで起き上がり、青年の腕に抱きついた。今更少女の格好に気づいたのか青年は目を丸くする。兎族の目は本当に真っ赤で綺麗だと、場違いにも少女は思つ。

「お礼してあげよっか」

大抵の男ならばこれで陥落した。山中で人間に見つかったとき獸の象徴がないと、化物だとなんども殺されかけたものの、そんな場所に分け入つてくるのは男だけだ。ほとんどの男はこれで喜ぶ。そして言いなりになる。

別に青年を言いなりにしたいわけではないけれど、お礼ぐらいはしたいのだ。肌蹴た服の間から乳房を押し付ける。

「ううん、遠慮する」

しかし青年はさらりと言つた。『ぐぐぐく、通常の様子で。思わず少女が拍子抜けするも、淡々と青年は焼き芋を食べ続ける。うさぎの小さな口ではなかなか食べきれないらしく、まだ半分ほどだ。兎は性欲が弱いのだろうか。いやいや、何人か兎族にも同じことをしたはずだ。故に、これは彼という人間性。少女に魅力が足りないわけではない。

「いいのに。あなたのおかげで私は街中歩けるんだもん。だからやつちゃえればいいのに」

「あいにくだけど、子孫を残す本能はあんまりないんだ。君は外見に獸の象徴がないけど僕は内側に獸の象徴がないみたいだ」

「……そういうものなの？」

「そういうもののなの」

だからべつにいいの。そう青年は締めくくる。

……なんだかバカみたいだ。少女は肌蹴た服のボタンを戻し、毛布にくるまる。子孫を残す本能がないならば仕方ない。ちょっとぐらいお礼がしたかったのに、とも思うけれども。

青年はまだもぐもぐと食べ続けている。その横顔を見つめる。色が白い。髪の毛は銀だ。少女の髪の毛は灰色だ。もしかして自分は鼠族だつたんじゃないかと思う。母は鼠族だつた。おそらく、あの人が母だということは知っているから。だつてその村のそばにずっといたから。だから、あの人気が母だと、

うつらうつらと実にならないことを考える。母は、もし母が自分を捨てなかつたら、こんなふうに優しくしてくれたんだろうか。少女はなんの実にもならないことを考える。

すう、と寝息が聞こえ青年は食べるのをやめる。焼き芋一つは多すぎたようだ。もしくはもつとゆっくり食べるべきなのか。

「寝た？」

念のために声をかける。返事はない。

だつたらいいんだ。青年はほつと息を吐いた。

「今まで、大変だつたんだろうね」

兎族特有のやわらかい手で彼女の頭を撫ぜる。先程男を誘う姿は妖艶だつた癖に、今じやあ唯の子供のよつな、安らかな寝顔を晒している。こんな子供があんなことをしなきや生きていけないなんて怖いなあ、と他人事のように思つ。

実際、街に出てみるまで他人事だつた。ただ館に籠つてものづくりをしていればいいだけの生活から逃げ出したのはいいけれども、

どこでなにをしたらいいのかわからない。金だけはあった。自分が稼いだものを奪われる前に一分だけではあるけれども保管していたから。けれども使い道もわからなかつた。

拾つた少女は、ある意味最高の道具だ。耳も尾もない、獸に愛されなかつた少女。実験台には最適で、彼が作る商品の試し使いには十分だ。でもそれより。

「おやすみ」

ちゅ、と髪の毛にキス。たぶんこれが、母性本能だ。女ではないけれども、この幼い少女を守りたいという気持ちは母性だろつ。青年は微笑んだ。もしかしたら兎の、誰かがいなければ死んでしまうというただの本能かもしない。母性、なんてつかない種族固有の意味のないモノ。でもそれより、この子を守りたいというモノだと変換した方が青年にも気分がいい。

愛するということがよくわからないけれど、きっとこれが愛。愛するということは生きるということ、と言つていたのはだれだつけ。きっとこれで僕も生きているという定義に当てはまるんだろうか。青年も少女の隣に転がつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1347u/>

兎青年と少女

2011年6月18日10時27分発行